

旧植田家だより

KYU-UEDAKE INFORMATION

Vol. 17

2013年7月発行

開館 5 周年記念展示

植田さん家の名品・お宝

ぶらりまちあるき～平野川編～



コラム連載中

「落穂拾い - 今東光の薫風 - (十一)」



展示のご案内



安中新田会館跡 旧植田家住宅

開館5周年記念展示(前期)

からだ めいひん たから

植田さん家の名品・お宝

～植田家を語るものたち～

工芸品編

2013年
7月4日(木)～9月1日(日)

◇8/4(日) 開館5周年記念講演会
14:00～ 講師 高橋瑞穂氏
(関西大学大阪都市交通研究センター)

休館日＝火曜日、7月17日(水)、8月19日(月)
開館時間＝午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
〔入館料〕一般200円、高校・大学100円、中学生以下は無料
※8月18日(日)～9月1日(日)は「入館料無料期間」

主催：NPO法人HGAJ
協力：関西大学 大阪都市交通研究センター

八尾市指定文化財
安中新田会館跡 旧植田家住宅
〒581-0064 大阪府八尾市堀田町1-23 TEL:072-692-5311
ホームページ <http://www.ondanekotsuka.jp/>

開館5周年記念展示(前期)

「植田さん家の名品・お宝 ～植田家を語るものたち～ 工芸品編」

2013年7月4日(木)～9月1日(日) ※休館日はP15をご覧ください

※8/18(日)～9/1(日)は「入館料無料期間」

次回 通常展「大和川付け替え関連展示」(9/5～10/30)

河内平野・大和川付け替えの歴史、植田家の出来事など、年表形式のパネルで展示します。旧植田家住宅の所蔵品も一部展示。

予告 11月

開館5周年記念展示(後期)「植田家を語るものたち～書画編～」

Contents

- 4 開館 5 周年記念展示
植田さん家の名品・お宝
- 6 講座
大坂画壇の現状と展望
- 7 八尾再発見！文学に見る八尾
「在原業平の河内通い」と八尾の伝説
- 8 まちあるきイベント
ぶらりまちあるき～平野川編～
- 10 研究の一と：ファイル 5「音消し壺」
- 11 第 5 回 河内木綿まつり
- 12 なにわの伝統野菜栽培日記⑩
- 13 植松のまち・ひと ― 第 11 回
- 14 コラム「落穂拾い - 今東光の薫風 - (十一)」
- 15 旧植田家住宅のご案内



表紙写真

きんぎんまきえしょうちくばいもんほかい 「金銀蒔絵松竹梅文行器」

行器は、特別な日の食物を運ぶための木製の蓋付き容器です。この行器は、松竹梅の文様が金銀蒔絵で施され、飾り金具が付いた非常に豪華な作りになっています。その意匠から元禄期（1688～1704）に作られたものと考えられます。



※『旧植田家住宅だより』のバックナンバーはホームページからダウンロードができます。
<http://kyu-uedakejutaku.jp>

植田家に伝わる
優品が
勢ぞろい



尾形乾山《色絵花文香炉》

開館五周年記念展示

植田さん家の名品・お宝



十代 旦入《黒樂茶碗》



《染付団龍文大皿》



中村宗哲《棗》

開館五周年記念展示

「植田さん家の名品・お宝」

安中新田会所跡 旧植田家住宅は、平成二十一年の五月に開館してから、今年で五年目を迎えます。当施設では、開館五周年を記念して「開館五周年記念展示(前期)」植田さん家の名品・お宝、植田家を語るものたち「工芸品編」(七月四日(木)～九月一日(日))を開催しています。本展では、工芸品を中心に、これまでの調査や企画展などの中から選りすぐりの優品を集めました。ここではその見所を紹介します。

今回、優品の基準になっているのは、まず何といっても見た目の豪華さ。つまり「意匠の優れたもの」で、例えば《金時絵秋草文五段重箱》や《金銀蒔絵松竹梅文行器》などがあります。また「産地や作者が特定できるもの(＝有名なもの)」や「時代がわかるもの(＝主に古い年代のもの)」も優品の基準として選んでいます。

展示は陶磁器・金属器・漆器・茶道具と大きく四つのコーナーに分けられ、その中でも今回、目玉になっているのが次の三点です。まずは陶磁器の中から、江戸時代中期に活躍した尾形乾山(おがたけんざん)(二六六三～

名品・お宝との 出会い



一七四三)の作と伝えられる《色絵花文香炉》です。器全体に白化粧が施され、側面には色絵で花の文様が描かれている色鮮やかな作品です。二つ目は、茶道具の中から有名な樂家十代 旦入(たんいゆう)(二七九五~一八五四)作の《黒樂茶碗》。黒色の素地に白色の渦巻き文様が引き立った逸品です。そして最後も茶道具の中から、※千家十職の一人で漆師の中村宗哲(なかむね)作の《棗》(なつめ)です。萩や桔梗

といった秋草がデザインされた繊細優美な作品です。

このほかにも、陶磁器では江戸時代末期頃の肥前系(佐賀県・長崎県)の窯で焼かれた《染付団龍文大皿》や《色絵草花文三つ鉢》、中国・明末期(一七世紀頃)に作

られた《呉須赤絵龍菊牡丹文大皿》などがあります。また金属器では、植田家の家紋が入った銀製の銚子や、京都の金工家・金谷五郎三郎作の火鉢や茶托なども展示しています。そして漆器では、豪華な蒔絵が施された《金蒔絵秋草文五段重箱》と《金銀蒔絵松竹梅文行器》のほか、《絵変蒔絵吸物椀》や《七つ重ね盃》なども展示してあります。茶道に精通していた旧植田家住宅の茶道具も見逃せません。



《金蒔絵秋草文五段重箱》

本展では植田家の名品・お宝の名にふさわしい優品の数々が勢揃いし、皆さんの来場を待っています。また、八月の後半には入館無料期間もありますので、この機会にぜひ安中新田会所跡旧植田家住宅に足を運んでみてください。

なお、開館五周年記念講演会(八月四日)の様子は、次号の『植田家だより』で紹介します。また、今回の展示は開館五周年記念展示の前期展として工芸品が中心でしたが、十一月から始まる後期展では、植田家所蔵の掛軸や屏風など、書画類の優品たちが登場します。乞うご期待。

開館五周年記念展示(前期)

「植田さん家の名品・お宝

～植田家を語るものたち～工芸品編」

→7月4日(木)～9月1日(日)まで開催

※火曜日、8月19日(月)は休館

◎8/18(日)～9/1(日)は「入館無料期間」

次回予告

開館五周年記念展示(後期)

「植田家を語るものたち～書画編～」(仮)

11月2日(土)～12月25日(水)

講座 大坂画壇の現状と展望

六月十五日（土）、関西大学教授の中谷伸生氏をお招きし「大坂画壇の現状と展望」について語って頂いた。日本の近世近代美術の専門家で大坂画壇研究の第一人者でもある中谷氏は冒頭で「やや硬いタイトルになっていきますが」と述べられたが、大坂画壇だけでなく、日本美術の現状と問題点にも言及し、身近なテーマとして聞くことができた。

まず大坂画壇を語る前に問題になるのは、日本美術の需要と評価についてである。日本美術史では、今回取り上げられる大坂画壇の



大坂画壇について語る中谷伸生氏

ような絵画は無視されてきた。その理由として、明治の初め頃に体系化された日本の美術教育が、日本ではなく海外からのある偏った価値観（とりわけフェノロサ、岡倉天心などの美術批評による影響）によって成されてきたことが挙げられる。また日本の近代社会においては、中国の影響を受けて発展し様式化された日本の絵画（浮世絵や琳派の絵画など）が好まれ、中国文化の影響がそのまま見られる絵画が程度の低いものとして扱われてきたという。中国風に描かれた大坂画壇の絵画もまさにこうした背景の中で、今日の評価を受けている。

私たち日本人が好きな日本美術（絵画）といえば、別の誰かによつて固定の価値観が与えられたものだということを、中谷氏はいくつかの例を挙げながら説明された。昨今、日本で評価の高い伊藤若冲や池大雅などがその好例で、ブランド化されたものに日本人は価値を見出すという。こうした見方から脱却するべく、大坂画壇の作品を再考しようではないか、というのが今回の講座の焦点であった。

現在、日本の研究者やコレクターの間ではこうした動きが広まりつつあるという。これまで海外のコレクターや研究者が日本の美術に対して客観的かつ絶対的な目で評価を高めてきたように、私たち一人一人が身近にある美術をもう一度見直そうということである。その始めとして、大坂画壇の作品に注目し、視野を広げることで、作品の持つ真の価値観や美術に対する新しい視点を獲得しようとするのである。

当日会場となった座敷の床の間には、旧植田家住宅所蔵の大坂画壇関連の掛軸（岡田半江と菅楯彦の作品）が掛けられた。講座修了後、早速、新しい視点各々の審美眼をもって作品を見極めようとする参加者の姿がみられた。

（旧植田家住宅芸員 安藤亮）



岡田半江《扇面図（春蘭）》

6/30 八尾再発見！文学に見る八尾

「在原業平の河内通い」と 八尾の伝説

どのようにして伝説は生まれたのか？



『河内名所図会』より

「業平の河内通い」の場面

文学に見る八尾

「在原業平」「河内通い」「高安の女」「二節切りひとよぎの笛」「十三峠」「恋の水」など…。「在原業平の河内通い」をはじめ、八尾には数多くの伝説や伝承が残されている。こうした伝説が生まれる前提となっている要素とは一体何であるのか。このことについて、講座「文学に見る八尾」では、大阪経済法科大学教授の浅見緑氏にお話して頂いた。

在原業平と河内通い

若くて容姿端麗で自由奔放、高貴な家柄の出身で歌も詠む。この人物こそが在原業平だと伝えられる。もちろん実在の人物だというのが、業平の伝説のもととなっているのが『伊勢物語』である。その注釈書には「七千三百人の女性と付き合った」とも書かれているようだ。現代においても、業平やその周辺にまつわる伝説や伝承が多く残され、また種々多様に解釈されている。

伝説は、長い年月を経て、様々な書物や口伝などによって伝えられ、そして少しずつ変化していくという。伊勢物語に登場するお馴染みの「高安の女」の評価も色々で

ある。「手づからいひがひとりて」という部分の解釈を「自分自身（自ら、自分の手）でご飯を…」とせず、「手づかみで…」や「匙をぺろぺろなめながら…」とするものもあるという。作品のイメージを創造するために、都合のよい解釈がつけられ、それが伝わっていく。こうした過程に（おかしな）伝説や伝承が生まれてくる。

また伝説はその土地や目に見えるものにも生まれる。いわゆる伝承の地などがそうであるが、本来そこにはないものやある伝承を伝えるために、無理に作られることがある。しかしその背景を読み解くことで、そこに隠された真実や新たな発見があるということ、本講座を通じて学んだ。

（参加者）



講師の浅見緑氏(上)と会場の様子(下)





⑤ 新家天満宮

創建年は不明。明治41年(1906)に菅原神社に合祀。昭和24年(1949)に社殿再建。境内に鞍作、南鞍作、新家の三ヶ村を潤した三鞍作用水樋門の顕彰碑があり、樋門の石材と金物が保存されている。



⑥ 旧平野川跡の緑道

平野川跡が緑道に整備されている。三鞍用水樋跡で、樋に使われていた石を保存している。



⑦ 凡河内躬恒の歌碑

平安時代前期の歌人。三十六歌仙(藤原公任の『三十六人撰』に載っている和歌の名人36人の総称)の一人。『もみじはのながるときは たけかはのふちのみとりも いろかはらむ』。清流の竹瀬川を訪れた際に詠まれた和歌で、「拾遺和歌集」に残されている。

※この歌碑は目立たない場所に設置してありました。



⑧ 永代橋跡と平野川跡の公園

文化3年(1806)4月築造の石橋が保存されている。石橋を中心に約100m旧平野川跡が公園として残されている。



⑨ 使い場と柏原舟

使い場は、船の物資の揚げ降ろしをした場所で、かつては村ごとにあったと思われる。河川改修で川から離れた位置になってしまったが、そのまま保存されている。

柏原舟は、元和6年(1620)・寛永16年(1639)と大和川水系の大洪水復興の為、代官末吉孫左衛門は大坂町奉行の内諾を得た上で大井村・柏原村の庄屋の協力も得て平野川筋の川浚えを通船可能にした。舟は二十石積、長さ約19m、幅2m、深さ0.42mの浅川舟40隻を以て舟仲間を組織して積荷運送を始め、その利益を水害復興資金に充て、柏原村で舟持ち十五人で営業を始める。四年後には、70隻に増船されたという。



ちょっと寄り道…船板堀の土蔵
※使い場からすぐの民家で発見。



※目標地点に到着！約2時間半の道のりでした。

⑩ 南木の本防災公園

2012年11月に府立八尾南高校の跡地にできた市の防災施設。体育館や運動広場・自由広場などがあり、平常時は市民のスポーツ活動や憩いの場として活用し、災害時には一次避難地・避難所等として活用される。



⑪ 了意橋

了意川の名を残す橋。平野川のこの辺りから青地樋門の辺りまでを了意川と呼んだ。久宝寺村の安井了意が16世紀末に平野川の川筋を広げて通船しようとしたため「了意川」と呼ばれたともいわれている。

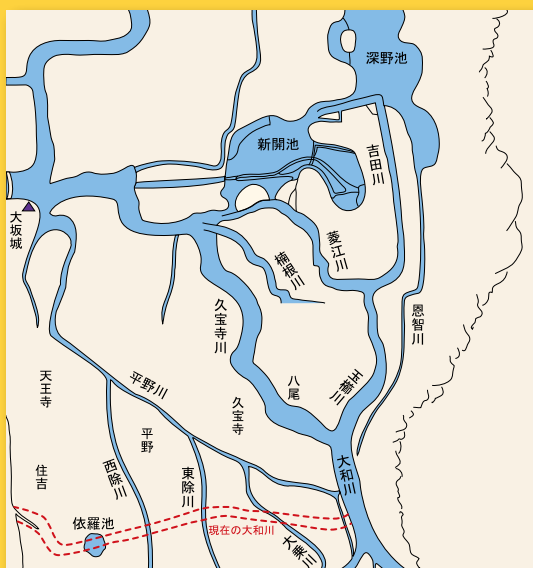
※ここで解散。お疲れ様でした。

まちあるきイベント ぶらりまちあるき ～平野川 編～

まちあるきの説明を
聞く参加者たち



付け替え以前の
大和川水系



5月19日(日)、絶好の曇り空の下、「ぶらりまちあるき」を行ないました。これまでに行なった旧大和川流域のまちあるきから少し離れ、今回は旧大和川と関連のある平野川を散策しました。

JR加美駅近くの菅原神社から出発し、旧辻元家住宅、奥田家住宅を通過、まずは南の旧平野川跡の道路へ向かいました。1704年の大和川付け替え以前の平野川は、現在よりも川幅が広く、「柏原舟」と呼ばれる物資運搬船も往来し、とても大きな川でした。また平野川はぐねぐねと蛇行し、水害も多かったそうです。そのため、たびたび治水工事が行なわれ、直線的に改修された場所や旧川跡に作られた緑道や公園などが現在多く見られ、今回のまちあるきの大きな見所になっています。

平野川までやって来ると、あとは目標地点の八尾市立南木の本防災公園まで、ひたすら川沿いを南へ歩きました。途中、新家天満宮や凡河内躬恒の歌碑、使い場など10カ所以上の歴史スポットにも立ち寄り、最後は了意橋で解散し、約3時間のまちあるきを参加者の皆さんと楽しむことができました。

ここでは、まちあるきの中で通過したいいくつかのチェックポイントを紹介します。



①菅原神社

鞍作の神社。「方除天神」とも呼ばれ、7月には「だんじり」が出る夏祭りがある。車のお祓い専用の場所が設けられている。



②旧辻元家住宅 (かんこ平野郷屋敷)

平野郷鞍作の豪農辻元家の本宅として江戸時代初期に建設された近世和風建築。90年から「かんこ平野郷屋敷」の施設となり、93年から屋敷内に「くらしの博物館」を設置する。



③奥田家住宅

鞍作村と呼ばれていたこの地域で、代々鞍作の庄屋を務めていた奥田家は、付近10カ村の庄屋総代だったという。江戸時代初期に建てられた屋敷は7棟が国指定重要文化財になっている。奥田家は、植田家と姻戚関係にある。



④旧平野川跡の道路

蛇行した平野川は、度々浸水被害をもたらした。それを解消するため、中央環状線西側から今川合流点まで大阪府と大阪市で1969年～1973年に河川を直線的に改修している。旧河川跡は、道路や緑道、公園などになっている。

※大きく曲がっている道から旧河川のかたちが想像できます。

研究
のーと

ファイル5

おどけ つば

「音消し壺」

旧植田家住宅 学芸員

谷口 弘美



植田家所蔵の「音消し壺」。側面（写真左）と正面（同右）。

旧植田家住宅には約四万点にもよる収蔵品がのこされ、その中には用途不明の資料がいくつか含まれている。今回紹介するものもそのひとつであったが、それが便所内での排泄音を消すための「音消し壺」であることが最近わかった。

現在、主に公共の女性用トイレで、流水音などを擬似的に発し排泄音を消す「トイレ用擬音装置」（※）をよく目にするが、こうした装置がすでに江戸時代に存在していたという。それが音消し壺である。トイレについて様々な視点から考察する『トイレ考現学』によると、音消し壺は便所脇に置かれ、姫君などの身分の高い人が用を足す際、近くに控えた付き人などが水の入った壺の栓を抜いて水を流し、その流水音で排泄音を隠したとされる。また、手洗い用にも使われたようだ。

植田家にある音消し壺は、高さ五五センチメートルの青銅製で、蓋の上部に獅子が装飾されている。また、両側の取っ手部分は象に似た生き物と蛇口の部分は龍がかたどられている。植田家がこの音消し壺をいづごろ所有し、またどのように使用したのかについてはわかっていないが、江戸時代から代々、安中新田の支配人をつとめ、身分の高い人もよく

訪れたという植田家でこの音消し壺が使用されたと考えられる。

こうした音消し壺は、各地の旧邸や庄屋、本陣屋敷などに現存し、亀の装飾が付けられたものや陶器製のものなど、意匠や素材も様々である。音消し壺についてはまだまだ不明な点が多いため、その分布や産地についても今後、調査していきたい。もし、音消し壺についての情報があればご一報ください。

※「音姫（TOTOの登録商標）の名で定着



音消し壺のある風景 ※画像はイメージです。

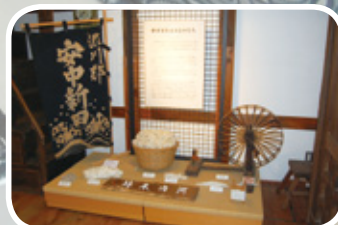
実際にこの場所には置いていません。

平成25年5月11日(土)・12日(日)

第五回

河内木綿まつり

人・ヒト・ひと!!
で大賑わい



毎年九月に行なわれている「河内木綿まつり」(八尾市立歴史民俗資料館主催)ですが、今年は早めの五月十一日(土)と十二日(日)に行なわれました。

初日は朝から雨で出足が心配でしたが、前日の「出前授業」を受けた地元の永畑小学校四年生たちと、当日予定していた畑企画が延期になりそのまま参加してくれた子どもたちで綿くり、糸紡ぎのほか、機織りまで楽しむことができました。

さて二日目は、近鉄八尾駅主催のウォーキングイベント「TRY あんぐるウォーク」の日と重なり、そのコースに植田家が入っているのです。どれくらいの人数が立ち寄るのかとドキドキのスタッフ…。十時頃から続々と訪れるウォークの人たちで受付は行列、施設内も人・ヒト・ひと!! その喧騒の中で木綿まつりが行なわれ、体験を指導するスタッフも指導される方も汗だく。ウォークの人たちは立ち寄るだけで先を急ぐため木綿体験はパスするのですが、みなさん興味深々で質問したり、写真を撮られたりするのでその対応にも追われました(館内は撮影禁止になっています)。



午後になり、人の出入りもやっと落ち着き、あとはのんびりじっくりと体験を楽しめるようになりました。参加者の子どもたちの中には、毎月行なっている木綿体験などで糸つむぎがとても上手くなっている子も何人かいて、参加者の大人の方に指導(?)してくれたり、学校や家の出来事をスタッフや他の来館者の人たちとおしゃべりし、あちらこちらで楽しそうな笑い声も聞こえていました。

例年になく忙しい木綿まつりになりましたが、毎年楽しみにしている人もいて、今年も一〇〇名以上の参加があり、無事に終えることができました。

澤田知英子(スタッフ)

なにわの伝統野菜 栽培日記

No.17

カマドでご飯炊き



イチゴ大豊作！

【釜ばあデビュー】

五月、ウスイエンドウが旬をむかえた。昨年より若干、収穫量は少ないものの、まずまずの出来だ。かまどを使い、新鮮なウスイエンドウで作る豆ごはん。獲つてすぐの豆は、皮が全く口に残らず、驚くほど甘くてやわらかい。それを、しっかりと浸水させた、ちよつといいお米に加え、薪の火力で一気に炊きあげる。…おいしくない訳がない。しかし、実は心配がひとつ。今回の釜番は、かまどでご飯を炊いたことがない私だ。今まで、ご飯炊

きはお手伝い程度しか経験がなかった。前日から「もし失敗したら…」と緊張で寝付けず、朝を迎えた。

もう逃げられない(笑)。以前のご飯炊きの時に、教えて頂いたことをよく思い出し、悪戦苦闘。そして何とか無事炊きあげる事ができた。(おこげもバッチリ！予想以上にうまく炊けた。師匠に感謝！)これで少し、いや、かなり自信がついた単純な私だった。やはり数名いた豆ぎらいの子どもも、「甘い！」と残さず食べてくれた。



お守りのノートを置いて奮闘中



無事に炊き上がった豆ご飯

【イチゴまみれ】

とにかく大豊作だ。心配していたナメクジ被害も免れ、毎日が収穫祭状態。当初、二〇株ほどだったイチゴの苗は、今では一〇〇株を超えている。以前、ご紹介した桃の味がする「桃薫」をはじめ、四季成りのものなど、

数種類を育てている。

永畑幼稚園の園児も、ひとり一粒だが三度

収穫&試食ができた。

それでもまだまだイ

チゴはでき続け、あ

と数回は楽しんでも

らえたのだが、残念

ながら時間の都合が

つかず、今年の「イチゴ狩り」は終了した。

そろそろ子株をとる時期だが、途方もない

数。次は良い株だけを選びすぐつて来年のイ

チゴ狩りに備えようと思う。

(※旧植田家住宅のイチゴは

永畑幼稚園の見学用に育てています。)

.....

同じ頃、勝間南瓜と黒門越瓜、トウモロコシを植えた。伝統野菜にトウモロコシ？と思

われるが、植田家の畑は五年目を迎えた。そ

こで、土壌改良によいとされるトウモロコシ

を育てる事に。その代わり、昨年、激苦だっ

た毛間胡瓜は、見合せた。初のトウモロコシ

栽培。さて、無事育てられるか七月の収穫祭

が楽しみだ。



植松のまち・ひと

第十一回

JR八尾駅橋上駅舎・自由通路

駅舎の工事が始まってから三年が過ぎようとしている。長年親しんできた旧駅舎の姿も少し遠い昔の記憶となってしまった。

六月二十九日は新駅舎と自由通路の運用開始に先立ち、お披露目イベントが開催され、いよいよ七月六日から橋上駅舎及び自由通路の使用が開始された。今年に入り、建物が徐々に姿を見せ始めると、地元住民をはじめ多くの駅利用者や鉄道関係者（鉄道ファン）の期待が高まった。特に駅北側に設置されていた工事用の万能塀が取り外された六月には、多くの人が立ち止まり、思い思いに新駅舎を眺めていた。

北と南をつなぐ自由通路、

いよいよ開通！

環境の変化には良し悪しがあり、慣れるまでに時間がかかるが、これまで北と南を隔てていた大きな壁のようなものが、この自由通路の開通により取り除かれたことは、八尾（植松周辺地域）の歴史において大きな一歩である。まちに一体感がもたらされたことや、何より多くの人が気軽に往来できるようになったことが大きい。現在も駅南側にある万能塀では、植松周辺の寺社・地蔵等を紹介する写真が展示されている。これまで知らなかった地域のことを知るための架け橋になればと思う。

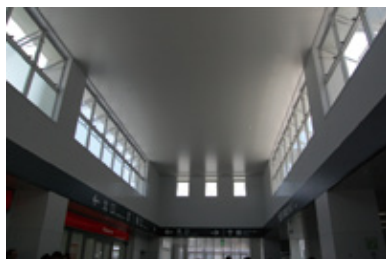
駅周辺の整備工事は来年まで続く予定。この八尾の新しい顔が、早く地元で馴染み、まちの誇りとなつてほしい。

マンジークン

安富士 暁



駅前展示も実施中（植松の寺社・地蔵）



自由通路の内部



昭和44年の国鉄八尾駅（南側駅舎）



植松からみた南側駅舎



完成した JR 八尾駅の新駅舎

落穂拾い

― 今東光の董風 ― (十一)

文・伊東健

記憶というものは距離によって支配されるものだ。人は忘れまいと記憶しているものも距離が遠くなるに従って、殆んど頼りないほど模糊としてくるものだ。それに反して、強烈な印象は距離と共に鮮明になってくる。

今東光が、はせくらろくえもんつねなが支倉六右衛門常長を主人公にして書いた小説「はせくら」(一九六一(昭和三十六)年四月二十五日、中央公論発行)の中で記した文章の一節です。

二〇一三(平成二十五)年は、日本スペイン交流四百周年の記念の年ですが、これは慶長遣欧使節が石巻市月の浦港を出帆したことに由来します。この記念すべき年に、支倉常長を代表とした同使節が持ち帰った関係資料が、ユネスコ記憶遺産として登録されたニュースは、忘れかけられている今

東光の仕事の一端を思い出させてくれました。

小説「はせくら」は、一九五九(昭和三十四)年『中央公論』五月号から連載が始まりました。前月号では連載予告を兼ねた対談が掲載されていて、その相手は音楽家の山田耕筰でした。山田耕筰と東光との関係の深さは別の機会に譲りますが、この対談の席上で東光は以下のように発言しています。

あの当時にですね、木造船で太平洋を横断して、一ぺんメキシコへ上つて、メキシコから出ていったのは、スペインの船、つまり軍艦でしょうな。それに乗って、まずスペインさしていっている。そして、とにかくローマまで行つた。往復前後八年かかっていますよ。(中略)

少壮気鋭の、いのちも何も惜しくない、火の玉みたいな連中が大壮挙を試みている。これは、たいへんなことです。ぼくは、それだけでも、ちよつと日本人の進取の気性にうたれますね。

山田耕筰にとつても若い頃から温めていた題材だったということもあり、二人はこの作品をオペラにすることを約して、別れます。真つ直ぐな野心を秘めた東光の力作「はせくら」は、日本側からは「陸奥丸」、洋式名では「サン・ファン・パウティスタ」と称された帆船が、宮城県雄勝町呉壺の地で密かに建造される場面から、ゆつたりと船出していきました。



1961(昭和36)年4月、
中央公論社発行

【2013年8月～10月】

旧植田家住宅のご案内

今後の展示・企画

※毎月第1土曜日は「河内木綿体験(5名限定)」
// 第3日曜日は「むかし遊びの日」を開催

展 示

◎7月4日(木)～9月1日(日)
開館5周年記念展(前期)
「植田家を語るものたち～工芸品～」

◎9月5日(木)～10月30日(水)
通常展「大和川付け替え関連展示」

展示、イベント等のお知らせは
ホームページもご覧ください
<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

企 画

◎8月
4日(日) 開館5周年記念講演会
10日(土) 連続講座1-2「ちょっと歴史のまちあるき」
21日(水) ボランティアガイド養成講座④

◎9月
1日(日) 講座「中世八尾の遺跡」(講師:原田昌則氏)
28日(土) 連続講座1-3「ちょっと歴史のまちあるき」

◎10月 未定
※詳細は9月以降、ホームページ等でご確認ください

(詳しくはお問い合わせください)

休館日カレンダー

■ = 休館日

8 August

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

9 September

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

10 October

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

●開館時間: 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

●休 館 日: 火曜日・祝日の翌日・年末年始
(詳しくは休館日カレンダーをご覧ください)

●入 館 料: 一般200円(団体20人以上で100円)
高校・大学生100円(団体50円)
※中学生以下、身体障がい者手帳等の所持者
および介助者は無料

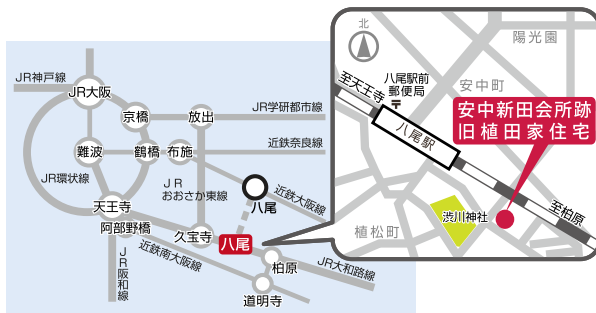
●お問い合わせ

〒581-0084 八尾市植松町1-1-25

TEL/FAX: 072-992-5311

E-mail: info@kyu-uedakejutaku.jp

※当施設には駐車場はありません。車での来館はご遠慮ください。



◇JR大和路線「八尾」駅下車。南出口より東へ徒歩約3分

◇近鉄大阪線「八尾」駅から近鉄バス藤井寺駅前行

JR八尾駅前バス停下車。南東へ徒歩約6分



これからの社会に必要な「しくみ」と 「人の居場所」をつくる活動を行っています。

私たちは「社会が豊かになることによって、私たちが豊かになれる」という信念のもと、「新しいキャリア観をつくる」「中小企業のソーシャル化」「生物多様性」「地域を元気にする」をキーワードに、これからの社会に必要な「しくみ」と「人の居場所」をつくる活動を行っています。本業を通じた社会貢献をお考えの企業さま、持続可能な社会をつくるために何かしたいとお考えの行政・地域団体など各種事業体のみなさま、お気軽にお問い合わせください。



事例 : no.001
八尾ものづくり PR ブース
in 河内音頭まつり

八尾には日本に誇れるものづくり文化がたくさんあります。実は、誰もが知っている、使ったことのある、そんな商品がたくさんあります。ただ、そんな商品が八尾生まれだということは意外と知られてません。そんな「八尾生まれのものづくり」を PR するブースの出展を始め、様々な八尾のものづくりの魅力を伝える活動をしています。

NEWS 河内音頭まつりは 9 月 8 日に久宝寺緑地公園で実施！



事例 : no.002
環境意識の啓蒙活動
ハッピーアースデイの実行委員活動

「環境のことを考え行動する日」として各地で開催されるアースデイ。近畿大学学生を主体に運営を行う「ハッピーアースデイ大阪」に社会人実行委員として参加。開催地（久宝寺緑地）のある八尾市の企業誘致、広報物の企画・制作なども担当しています。

NEWS 2013 年秋は 10 月 19、20 日に久宝寺緑地公園で実施！

リレー
コラム

私たちと、八尾の街。



絶滅危惧種の保護を地域古来の伝統的手法を通して、
生物と里山再生、そして次の時代の生き方を考える。

高安を含み、日本に残り 3 か所しか生息していない絶滅危惧種「ニッポンバラタナゴ」を守る活動をしている NPO 法人ニッポンバラタナゴ高安研究会の代表理事である加納さんは、会の活動やその意味をこのように伝えてくれた。
「行っているのはタナゴの保護活動だけではないんです。この活動を通して、水の研究や、山の環境保全、池の再生を行っているんです。ひとつの種だけを保全するのではなく、その生き物が生きていける環境を再生することではじめて保護が出来るんです。国土の約 40% を占める里山に、実はこれら絶滅危惧種のほぼ 50% が生息しているようです。この保全を行うということは、この里山の再生につながり、ひいては「持続可能な社会づくり＝次の時代の生き方」を作っていくことにもつながります。」
保護池を保全する古くからの手法である「ドビ流し」はユネスコにも認定された未来遺産活動。また小学校のビオトープづくりなど、NPO だから出来る活動がある、と加納さんは言う。
八尾という地域に、絶滅危惧種の保護活動を通して、これからの日本を考える活動を加納さんたちは今日も行っている。

取材協力：NPO 法人 ニッポンバラタナゴ高安研究会 代表理事 加納 義彦さん URL：www.n-baratana.go.com



いっしょにつくる、八尾想いプロジェクト。 私たちとあなたも始めてみませんか？

このプロジェクトは、私どもの本業を通した「社会への還元」を行う活動として実施します。
このプロジェクトに共感いただき、ご発注いただいたお仕事で得る、売上金の一部を「八尾を想うプロジェクト」へ支援金として還元する仕組みです。

『地域を元気にする活動に参加したい』

もしそのようなことをお考えであれば、私たちとまずは始めてみませんか？

プロジェクトの詳細はこちらから <http://www.seeds-c.co.jp/campaign/yaoomoi/>

お問合せ

CSR 室（直通）06-4801-8200

平日 11:00-17:00
(土日祝を除く)

PROJECT
001

ハッピーアースデイ大阪 2013 秋 (10 月予定) でのリユース食器レンタル費
へ「八尾想いプロジェクト」で発生
した売上金から 3% を支援！

PROJECT
002

ニッポンバラタナゴ保護池の保全活動
(保護池の清掃活動他) 費へ「八
尾想いプロジェクト」で発生した売
上金から 3% を支援！